

長原遺跡（NG06 - 3・4次）発掘調査現地説明会資料

2007（平成19）年3月17日（土）
大阪市平野区長吉出戸8丁目
大阪市教育委員会・財団法人大阪市文化財協会

はじめに

長原遺跡は大阪市平野区長吉長原・出戸・川辺・六反一帯にひろがる後期旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡です。大阪市教育委員会と（財）大阪市文化財協会は、大阪市平野区長吉出戸8丁目にある市営住宅建替え予定地において、昨年12月から発掘調査を行ってきました。調査は3つの調査区で行っており、東側の南北に長い2つの調査区がNG06 - 3次調査地、西側の東西に長い調査区がNG06 - 4次調査地です。

今回の調査地は縄文時代後期から晩期にかけて形成された出戸自然堤防の上に位置します。これは瓜破台地の東縁を南東から北西に向けて流れていた河川によって形成された高まりのことで、現在の平坦な地形からは想像できませんが、当時、この出戸自然堤防上は低地部と比べて0.8mほど高く、水害の影響を受けにくく生活しやすい安定した場所でした。そのため弥生時代から古墳時代には集落がこの自然堤防上で営まれており、これまでも竪穴住居跡や井戸・墳墓が見つかっていました。今回の調査地は、この自然堤防の西北端に位置すると考えています。

これまでの調査

調査地の東隣では市営住宅の建替えに伴って調査が実施され、古墳時代中期の畠やウマの埋葬、弥生時代中期の方形周溝墓が見つっています。方形周溝墓は2基あり、1号墓からは木棺の痕跡、2号墓からは土器棺が検出されています。

また、調査地の西側では近畿自動車道の建設に伴う調査が行われ、北500mの城山遺跡A地区では弥生時代中期の方形周溝墓が39基見つかり、西100mの城山遺跡D地区では古墳時代中期の小区画水田が明らかにされています。

NG06 - 3次調査地の概要

この調査では北区・南区に分けて調査を行っています。北区では現地表下3mの地層から、盛土をした高まりを4箇所で見つけました。高まりの間の溝からは古墳時代中期の土師器や陶質土器が出土しています。

南区では弥生時代中期の溝、時期はよくわかりませんが溝を伴う盛土をした高まり、古墳時代中期の大溝と建物群、古墳時代後期の流路と溝などが見つっています。この場所では古墳時代前期後葉から中期初頭に集落の最盛期があったようで、南東から北西に延びる幅3m、深さ1.5mの大溝の東側に古墳時代中期の竪穴住居跡と総柱建物などが見つっています。溝や竪穴住居跡の中からは多数の土器が出土しており、火を焚いた場所から朝鮮半島に起源をもつ韓式系土器の平底甕が見つっています。

NG06 - 4次調査地の概要

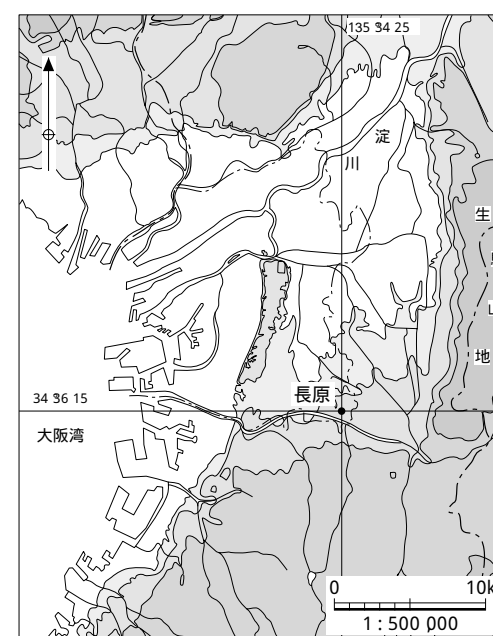
弥生時代から古墳時代にかけて、調査地の地形は西側に向かってゆるやかに傾斜していました。東側の高い場所には集落が継続して営まれていました。

現在も調査は進行中ですが、弥生時代中期後半・弥生時代後期後半・古墳時代中期の3つの時期の遺構や遺物が見つかりました。

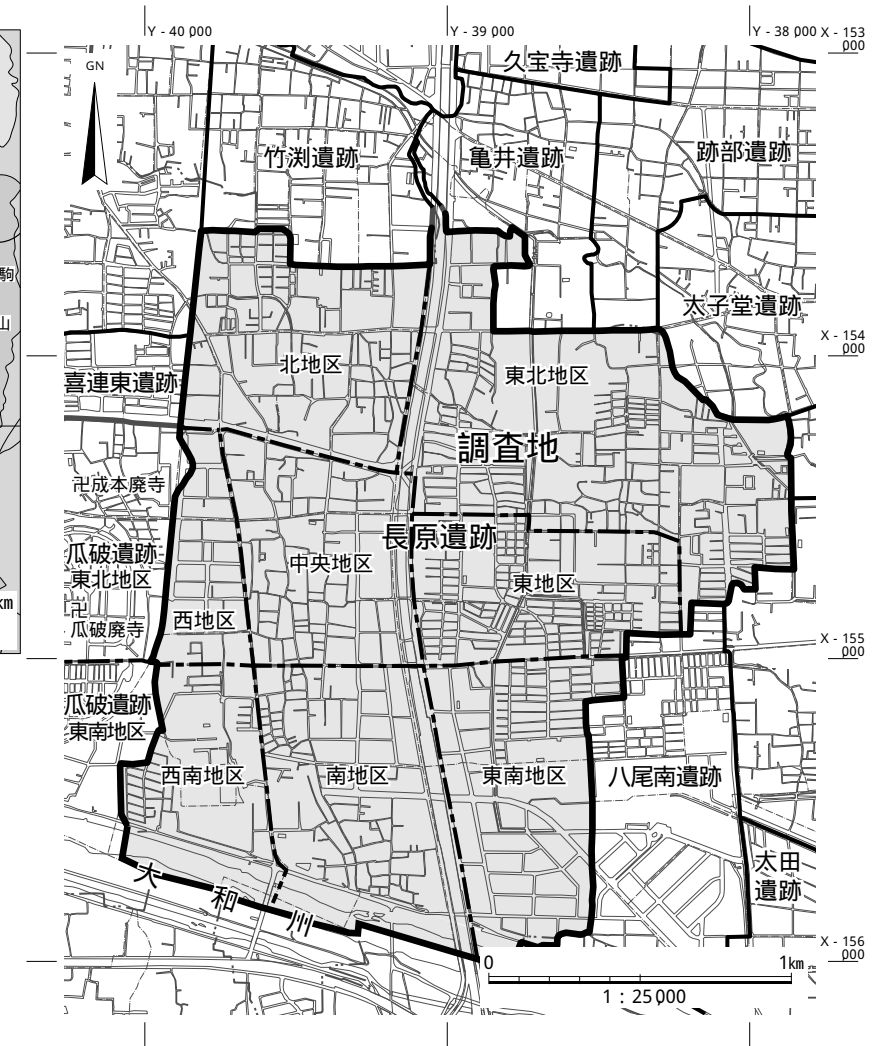
弥生時代中期後半の遺構としては、調査区の中央で見つかった大溝があります。ちょうど斜面のあたりに位置しています。幅約5m、深さ約1mで、集落を区画する溝とみられます。

調査地の東側では、弥生時代後期後半の方形の竪穴住居跡2棟と土器集積が見つかりました。1辺5～6mほどの方形の竪穴住居で、そのうち、東側の住居の壁ぎわから多数の土器が折り重なった状態で見つかりました。壺・甕・高杯・器台などがあり、住居の床面に置かれたそのままの状態出土しました。もう一方の住居からも土器がまとまって見つかり、壺には炭化した米が入っていました。

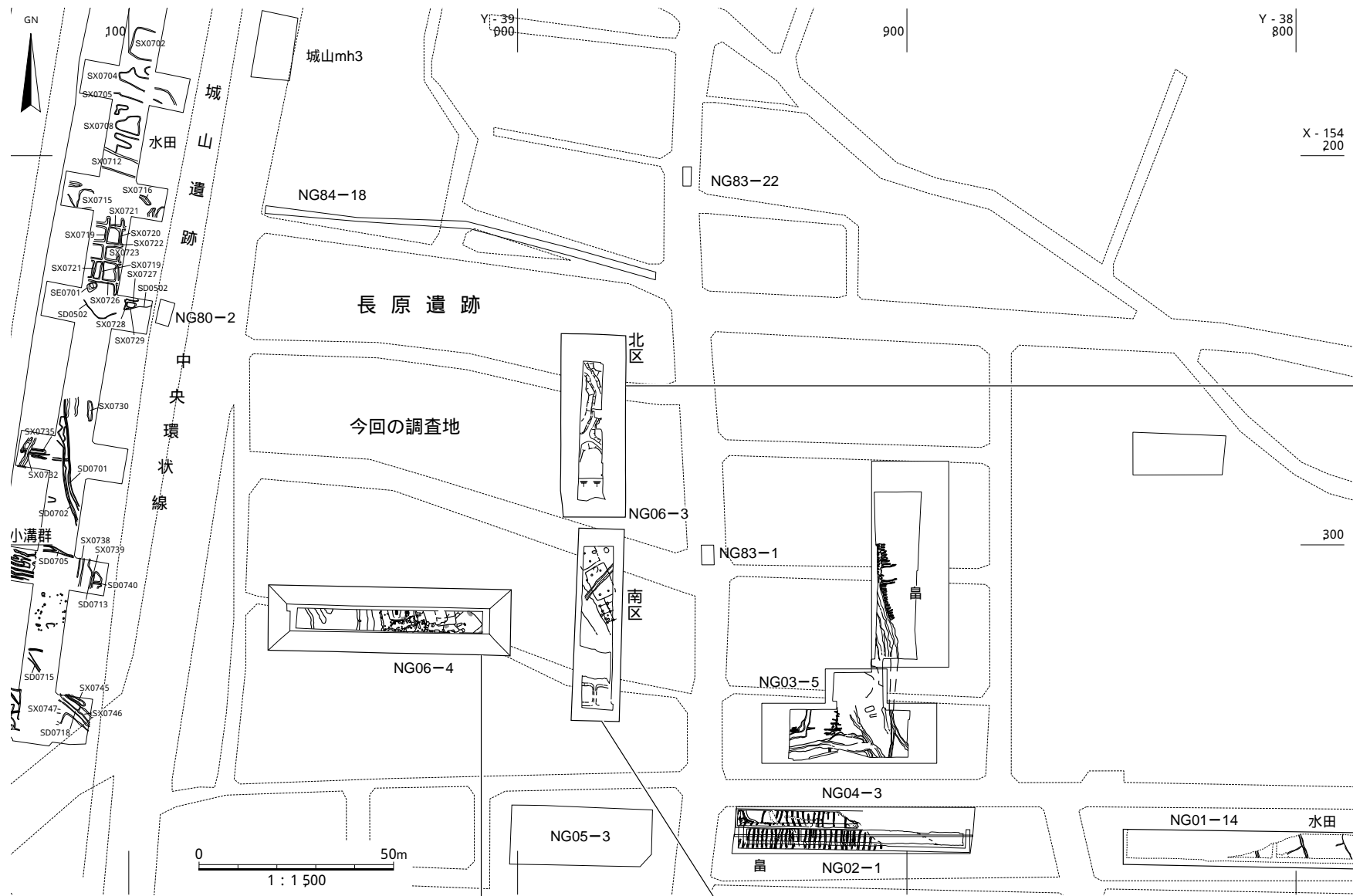
さらに、古墳時代中期の方形の竪穴住居跡3棟が重複した状態で見つかりました。この竪穴住居の中や周辺からは、土師器や須恵器とともに韓式系土器が出土しました。そのほか、同時期の柱穴や土壌、焼土や炭をとまなう小穴など、当時の生活を示す遺構が多数見つかりました。



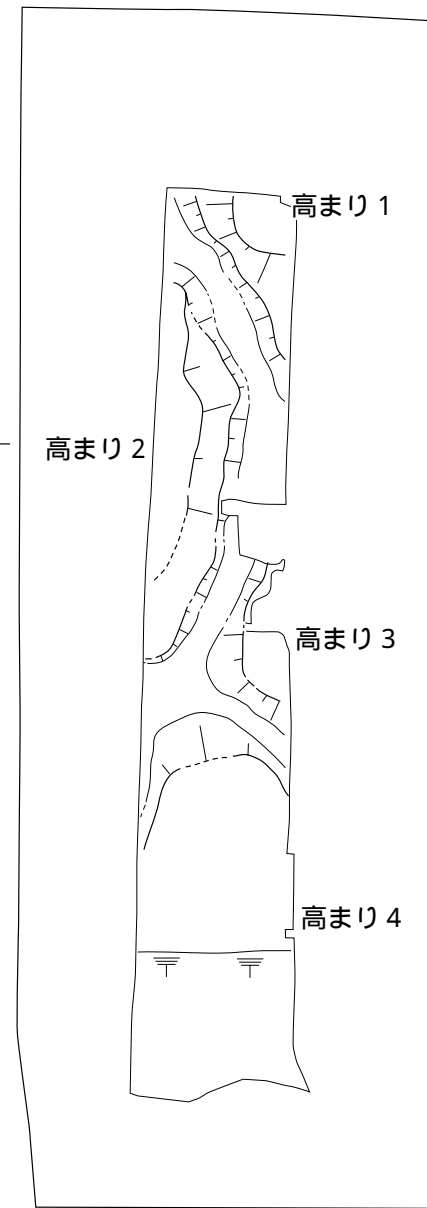
長原遺跡の位置



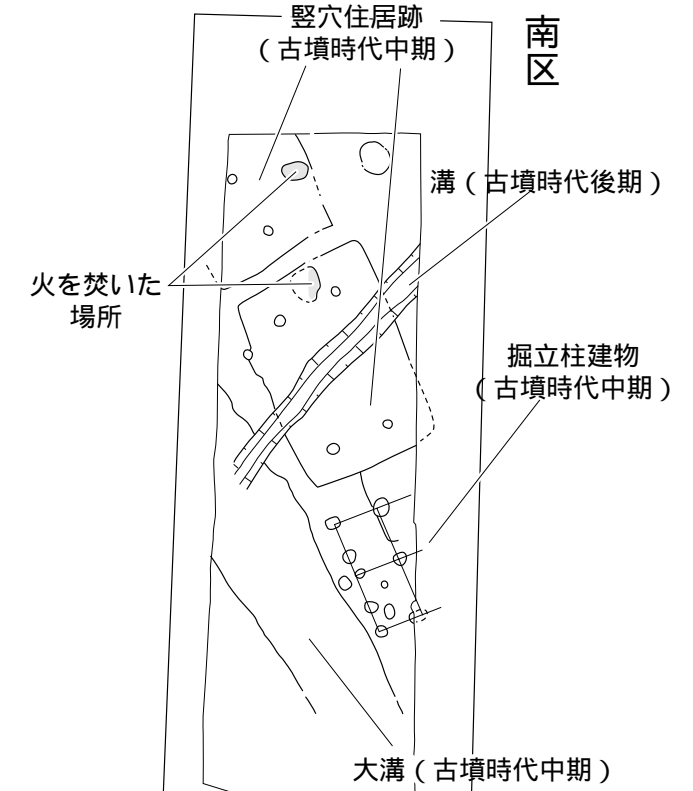
長原遺跡と周辺の遺跡



NG06 - 3調査地



北區



NG06 - 4調査地

